

令和7年度第3回大槌町総合教育会議 議事録

1. 開催概要

項目	内容
日時	令和8年2月20日（金） 午後1時00分から午後2時27分
場所	大槌町役場 3階 大会議室
出席者	【委員】町長 平野 公三、副町長 菊池 学、教育長 松橋 文明、教育委員 大萱 生 都、芳賀 新、木村 里美 【有識者】小池 敏英（東京学芸大学 名誉教授 尚絅学院大学 特任教授）、佐藤 駿一（東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部医師）、阿久津 遊（認定特定非営利活動法人カタリバ オンライン不登校支援事業責任者代理） 【事務局】藤原 淳（総務課長）、小國 晃也（健康福祉課長）、米沢 俊哉（学務課長）、岩間 純子（総務課主幹）、祝田 潤昌（総務課 課長補佐兼総務係長）、関谷 辰也（学務課 課長補佐兼大槌型教育推進係長）、金子 裕輔（学務課大槌型教育推進係指導主事）、照井 善博（学務課大槌型教育推進係指導主事）、南 景元（学務課 SSW）、大森 厚志（学務課教育相談員）
欠席者	【委員】教育委員 谷藤 怜美
議題	「けやき共育」の進捗状況について

2. 町長挨拶

- 「けやき共育」の取組において最も大切にしている思いは、「こどもたちを真ん中に置く」ことであると強調しました。こどもたちの周りに多様な学びの場と機会を用意し、学校・家庭・地域が連携して支えることが大槌町の目指す教育の姿であると述べました。
- 総合教育会議は推進の要であり、来年度以降も委員や専門家と話し合いながら、より良い教育をつくっていくサイクルを力強く続ける決意を表明しました。

3. 協議：「けやき共育」の進捗状況に関する報告

事務局による説明の要旨

- 有識者（阿久津氏）からの事前提案とその応答
 - 前回の総合教育会議での進捗状況報告を踏まえ、阿久津氏より以下の提案がなされたことが報告されました。
 - 学園の日常的な基盤強化：「けやき共育」を特別な支援に留めず、日常の仕組みとして位置づけ、早期の相談・情報共有の場や事例検討会を設けること。
 - 家庭まるごと支援の拡充：家庭の課題に対し、相談窓口など保護者支援の拡充を図り、教育と福祉等の部局間連携を整理し可視化すること。

- これに対し米沢学務課長より、提案を今後の推進に活かし、学園の日常生活そのものが安心安全で多様なニーズに応えられる場となるよう基盤を強化していくこと、また、多様な保護者支援の選択肢拡充や行政の枠を超えたより効果的な連携の枠組みを整備していく方針を示しました。

● **不登校（傾向）児童生徒への支援について**

- 不登校児童生徒の推移として、令和7年1月時点で小学校22名、中学校24名の計46名となっている状況を報告しました。
- 第2回大槌町学習・生活アンケート結果が報告された。自己受容（自分にはよいところがあるか）に課題が見られる一方、主観的幸福感（学校に行くのは楽しいか）や道徳観（いじめはいけないことか）は高く推移しており、心理的安全性が確保される集団づくりの重要性を示しました。
- 具体的な支援事例として、「けやき相談会」を契機にけやきルームを利用し、一人での登校再開に至った中学生のケースが紹介された。けやきルームは児童生徒から「コミュニケーションがとれる」「集中して勉強できる場所」として評価されていることが報告しました。
- 令和7年度の実績として、けやきルーム（1学期実利用者15名、2学期実利用者28名）、けやき相談会、けやき保護者会等の利用状況を共有しました。
- 尚絅学院大学の学生とリモートで繋ぐ読み書き支援等の取組により、児童生徒の音読に確実な変化が見られ、学習に対する前向きな意識向上が見られた成果を報告しました。

● **新たな学びへの取り組みについて**

- 教員の指導力向上を目指し、個別最適な学びや一貫教育の先進校（大熊町立学び舎ゆめの森、一関一高附属中、筑波大学附属小学校）への視察を実施したことを報告しました。
- 「大槌の教育」推進協議会全体研修会を開催し、専門家を招いた講演や実践発表等を通じて、授業づくりや学級経営に関する研修を深めたことを報告しました。

● **一貫した魅力的な教育を創る取り組みについて**

- 「幼保小をつなぐ架け橋カリキュラム」の作成に向け、架け橋カリキュラム開発会議や中学校教員も参加した保育体験、町内のこども園や学園での互見保育・授業を実施したことを報告しました。
- これらの取組を通じ、幼児期の経験が就学以降の学びを支えていることへの理解が校種を越えて深まり、こどもの発達に対する教員の理解が促進された成果を共有しました。

4. 質疑・応答及び指導・助言の整理

【委員より提出された質問・意見・要望の要旨】

- **芳賀 委員**：不登校の要因が家庭にあるケースが多いと指摘しつつ、学校だけでなく家庭でもこどもの良いところを褒めて自己肯定感を高めるアプローチを促すことの重要性を述べました。また、自身の経験にも触れ、何が登校のきっかけになるかはわからないため、学校・家庭・地域が連携して多様なきっかけ作りの仕掛けを用意

することが大切だと語りました。さらに、不登校生徒のカウント方法について、累積30日という基準だけでなく、休む日数が減っているといった回復傾向や支援による改善の実績を具体的に示し、評価していくことを要望しました。

- **大萱生 委員**：生活リズムの乱れを抱えるこどもが増加している現状に触れつつ、自身に関わる「けやきこども食堂」で、こどもたちが生き生きと安全に調理に取り組み、自分で作ったものを喜んで食べる姿が見られていることを報告しました。また、多様な進路を目指すこどもたちに寄り添い、ペースに合わせて指導している支援体制を評価し、こどもたちの「生きる力」を育む場として定着している「けやきルーム」の取り組みを今後も継続していくよう要望しました。
- **木村 委員**：幼保小をつなぐ「架け橋カリキュラム」に関連し、保育体験プログラムに参加する教員の選考方法について質問しました。その上で、関わりの深い特定の学年の教員だけでなく、多くの教員や地域の方を巻き込んで情報共有していくことが、現場の教員等の当事者が孤独にならず、前向きな空気を作ることにつながると提言しました。

【有識者より提出された指導及び助言の要旨】

- **小池 敏英 氏**：第2回学習・生活アンケートの結果について、「自分にはよいところがありますか」という自己受容の肯定的な回答が少ない点に触れ、こどもの良いところをさらに認めて伸ばしていく関わりの必要性を指摘しました。また、学生と連携したリモート支援については、こどもたちがゲームや絵を描くことなど好きなことを通じて学生と馴染んでいる様子を評価し、教員では立ち入りにくい世界もテーマに組み込みながらリモート支援を組み立て、機会を増やしていくことを提案しました。
- **阿久津 遊 氏**：けやきルームだからこそ拾える定性的な「こどもの声」を大切に、今後の居場所づくりの種としていくことの意義を述べました。また、小池教授の読み書きに関するリモート支援について、特性の有無に関わらずオンライン支援の可能性として評価し、支援に繋げる際のアセスメントや声掛けのプロセスについて関心を示しました。さらに、「幼保小の連携」について、年長の段階から小学校へ行く取り組みは他の地域の参考にもなる素晴らしい連携であると評価しました。
- **佐藤 駿一 氏**：不登校の「理由」について、学校や家庭など立場によって理由は異なってくるため、理由を分類・パターン化することは支援においてあまり役に立たないと指摘しました。理由探しよりも、不登校になった後の「経過」を丁寧に分析し、その後どうなっていくかを見立てることの方が重要であると強調しました。また、学校や家庭が互いに責め合う形になるのではなく、みんなで協力することで状況が良くなるという共通理解を持つことの重要性を述べました。

【副町長・教育長・事務局からのコメント要旨】

- **菊池 副町長**：現場の教職員が苦勞しながらも懸命に支援に取り組んでいることへ感謝を述べました。また、些細な関わり合いが不登校や登校再開のきっかけになることに触れ、教員やサポートスタッフによるこどもたちへの細やかな「関わり合い」

が重要であるとの認識を示しました。今後も委員や専門家の意見を取り入れながら、「けやき共育」の継続について必要性を強調しました。

- **小國 健康福祉課長**：こどもの発達課題に幼少期から対応する「早期療育」の重要性を強調し、社会福祉士や保健師等の専門資格を持つ職員や関係機関と連携しながら支援を行っている現状を報告しました。また、家庭の背景が複雑化している状況を踏まえ、職員のスキル向上や「こども家庭社会福祉士」などの新たな資格への挑戦を含めた人材育成に取り組み、包括的な支援体制の充実を図っていく方針を示しました。
- **藤原 総務課長**：健康福祉課長の人材育成に関する発言に関連し、世の中が常に変化していく中で、新しい分野にも対応できる能力を持った人材を育成・確保していく必要性を述べました。その上で、関係者間で情報を共有しながら、職員が研修を受講したり資格を取得できたりするような環境の整備を進めていきたいと意欲を示しました。
- **松橋 教育長**：佐藤医師の「不登校の表面的な理由を探っても、実際の支援には繋がりにくい。」という話に対して、これまで学校側の視点だけで捉えようとしていたことに気づかされたと述べました。その上で、「欠席日数が30日を超えたかどうか」といった数字ばかりを気にするのではなく、こどもの様子や変化をいろいろな角度からしっかりと捉え直して、今後の支援に生かしていきたいと語りました。

5. 総括

- **平野町長**：総務課長の発言も踏まえ、人材育成と包括的な支援体制の重要性に触れ、学校の教員が不安や負担を抱えずに支援に取り組めるよう、庁内で連携を図りながら長期的な視点でマンパワーを確保し、体制を整えていくよう指示しました。
- また、議会や町民へ本事業の意義を説明し予算を確保していくにあたり、不登校の表面的な数字（人数の増減）だけを示すのではなく、実際の取り組みの成果やプロセス、課題などをしっかりと「見える化」して伝えることが不可欠であると指摘しました。有識者からの助言も踏まえ、データの見せ方や説明資料を充実させ、「けやき共育」をさらに力強く推進していくよう求めて会議を締めくくりました。